

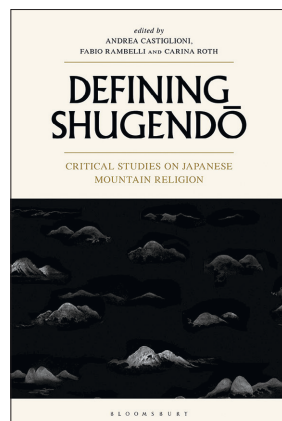
アンドレア・カステイリヨニ、ファビオ・ランベッリ、
 カリーナ・ロート編

『日本の修験道の批判的研究』

Andrea Castiglioni, Fabio Rambelli and Carina Roth, eds.

Defining Shugendō: Critical Studies on Japanese Mountain Religion

シエン・ドール



Bloomsbury Academic, 2020

ある古びた山道の脇に佇む、奉納文を封じた雨ざらしの役行者の像のように、修験道は、日本の社会や宗教の歴史に関する不可欠な示唆を含むにもかかわらず、長らく学問の周縁に置かれてきた (p.130)。仏教学や神道学、あるいは日本における新興宗教に関する研究に比べ、修験道は長年マージナルな課題として扱われてきた。今日に至るまでその大部分は、民族的な国民意識に関する問題を連想させる日本の民俗学分野の視座を通して研究がなされてきている。日本人の多くは、修験道があること、ましてやそれが今日の日本列島各地の山々の斜面や影において今もなお実践され続ける、千年以上の長い伝統であることすら知らない。

これら全ての状況を踏まえると、『日本の修験道の批判的研究』は、極めて重要かつ待ち望まれた貢献であるといえよう。本

書は、次世代の日本関連の宗教学者に修験道を紹介し、分野の現状を大きく変えるような幾つかの方向転換の可能性を示している。アメリカやヨーロッパ、日本の様々な専門家たちが集められ、山の修行、所謂「秘密の世界」を現代の学問のスポットライトの中に引き入れるような、これまでの英語刊行物の中で最も包括的な修験道の歴史的記述となっている。

編者たちによれば、本書の目的は修験道を民俗学の観点から「解きほぐし」、「宗教学および史学のより広い繋がりの中」へと「移す」ことにあると述べる。そのため本書では、十分な研究がなされていない日本の宗教として修験道を徹底的に分析するのみならず、「近年に至るまで修験道研究を特徴づけていた解釈上のカテゴリーや研究課題を批判的に再評価」(p.23)している。マツ

クス・モーマンの言葉を借りれば、本書は「あらゆる歴史的時代を通じて、あらゆる地理的地域における、そして全ての社会階層に属する人々にとつての、日本文化の中核をなす宗教的伝統として」(p. 219) 修験道を見事に位置づけなおしている。

本書『日本の修験道の批判的研究』は、「修験道研究の精神史」「構築されたトポロジーと作られた年代記」「想像上の役行者と修験道の虚構化」「修験道のマテリアリティと視覚文化」の四部から成る。各部には、日本の歴史の宗教的状况の中で修験道とその位置にまつわる幅広い論考が収められているものの、多くの章が比較的短く、幾分断片化された百科事典的な印象を与える。幾つかの章は、総合的な理解や統合への動きをみせているが、この本が一つの集合体として、いかなる全体像を指し示そうとしているのかを知りたいと思う読者もいるかもしれない。修験道に関する研究から日本、さらに広く見れば東アジアにおける社会や宗教について、どのようなことが分かるのか。修験道に関する継続的な研究は、いかなる学際的な洞察をもたらし得るのか。

徹底的かつ複数の時代にわたる歴史的記述がなされているにもかかわらず、今日における修験道の実践に関する言及が、本書ではほぼ省略されている。そうでなければ、広範囲を網羅した著作となったであろう。編者たちが主張するように、修験道がそれほどに重要であるならば、なぜ今日の実践が本書で見逃される傾向

にあるかは不明である。とはいえ、顕著な二つの例外が見受けられる。編者による序章の一節において、修験道の近代的解釈を、日本のアイデンティティをめぐる語りが過渡期にあつた戦前のエスノナシヨナリズムや戦後の懐古的な原始主義 (primitivism) として特徴づける箇所がある (p. 19-22)^①。また、鈴木正崇は、国の遺産プログラムやユネスコの世界遺産登録、そして近年国民の祝日の一つとして制定された「山の日」などから見た近代における山岳信仰の重要性について論じている (pp. 55-59)。これら以外に、本書では現代における修験道に関する論考は含まれていない。本書評の筆者からしてみれば、少なくとも現代の修験者にはどのような人物がいるのか、彼らが山中で修行する動機とは何なのか、またその考察から今尚息づく伝統としての修験道に関する何が明らかになるのかということを知りたかつた。

ケイレブ・カーターは、その一章において、戸隠山の修験道にまつわる縁起が十八世紀の僧により改編されたことについて論じ、それが神話的過去の懐古的、あるいは浪漫的な振り返りを表すのみならず、どちらかという修験道をローカライズし、新たなコミュニティでの役割を固定させ、長期持続 (longue durée) させるために用いられたと述べる。複数の矛盾する史実性を有する修験道の跡は、歴史のおよび民族誌的な記録にもよくみられる。カーターの考察にもあるように、これらの記述からは、修験道が新た

な社会的・地理的環境に入り込む際に一定の「一時的な伸縮性 (temporal elasticity)」と一般的な適応性を有することが明らかになる (p.86)。そのため、近代における修験道の特徴ともいえる懐古的な原始主義は、ある宗教が繁栄し広まるために、その慣習そのものが絶えず変容し続けていくことの現れであるとする方が、より正確かもしれない。言い換えれば、近代における修験道は、かつて真正であった伝統の単なる似姿 (simulacrum) ではないということの意味する。修験道が歴史的宗教として分析され、今日における実践がその記録において省略、または逸脱するものとして扱われる限り、近代における実践が真正ではないという見方が修験道研究の支配的な態度であり続けるであろう。

現代における修験道への言及の欠如はさておき、『日本の修験道の批判的研究』は、確固たる歴史のかつ神学的な基礎を示すのみならず、更なる研究の必要性を証明し、より注目されるべき領域を指し示している。何よりも本書は、修験道のアッサンブラージュによる歴史、すなわちその考え方や神々、複雑な寺院政治を寄せ集めることにより修験道の歴史そのものを表している。修験道は秘されるものとしての長い伝統があるが、近代において、透明性を求める感情は広まり、伝授や実践のしきたりなども変化しつつある。バブル崩壊後に続く、二〇一一年三月に発生した東日本大震災後における経済不振の中、そしてパンデミックが今なお

続く現在においても、修験道はこの世界に痕跡を残す準備をしているようである。本書の一つひとつの章が、この古来の宗教の新たな観点へと通じる入り口となり、修験道が日本列島を横断する山々に、密やかとはいえ常に存在し続け、日本の宗教史の中で紛れもない影響力を持ち続けてきたことを明らかにしている。

注

- (一) Hopson 2017 および Dahl 2019 も参照された。
 (二) Castiglioni 2019 と Dahl 2020 ならびに Dahl 2021 を参照のこと。

参考文献

- Castiglioni 2019
 Andrea Castiglioni. "Devotion in Flesh and Bone: The Mummified Corpses of Mount Yudono Ascetics in Edo Period Japan." *Asian Ethnology* 78:1 (2019), pp. 25–52.
 Dahl 2019
 Shayne A. P. Dahl. Review of *Emnobling Japan's Savage Northeast: Tohoku as Japanese Postwar Thought, 1945–2011*, by Nathan Hopson. *Japan Review* 32 (2019), pp. 199–201.
 Dahl 2020
 Shayne A. P. Dahl. "Buddhist Mummy or Living Buddha? The Politics of Immortality in Japanese Buddhism." *Anthropological Forum* 30:3 (2020), pp. 292–312.
 Dahl 2021
 Shayne Allan Peter Dahl. "Ascetic Resentment: Historical Consciousness and Mountain Politics in Northeastern Japan." *History and Anthropology* (2021). DOI: 10.1080/02757206.2021.1881081

Hopson 2017

Nathan Hopson. *Ennobling Japan's Savage Northeast: Tohoku as Japanese Postwar Thought, 1945-2011*. Harvard University Press, 2017.

翻訳：片岡真伊（国際日本文化研究センター准教授）

* 本稿は *Japan Review* 36 (2021) に掲載された英文テキストの日本語訳である。